

修士論文(要旨)

2015年1月

団塊ジュニア世代男性が持つ両親の介護に関する意識

指導

長田 久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

212J6013

上原隆夫

目次

1. 背景	1
(1) 高齢期をむかえた団塊世代	
(2) 少子高齢化による支え手の負担増	
(3) 男性介護者の増加	
2. 本研究の目的	2
3. 方法	3
(1) 分析対象者	
(2) データの収集方法	
(3) 分析方法	
(4) 倫理的配慮	
4. 結果	4
(1) <介護の予感>	
(2) <介護のイメージ>	
(3) <役割>	
(4) ≪感情≫	
(5) ≪リソース≫	
(6) <現時点での介護像>	
(7) ストーリーライン	
5. 考察	8

引用文献一覧

添付資料

- ・ワークシート (i ~ x x v)
- ・調査趣意書
- ・インタビュー項目
- ・調査同意書

1. 背景

今日の我が国では、少子高齢化,そして,団塊世代の高齢化が相まって,社会保障財政のバランスが崩れることが危惧されている.肩車社会の到来といわれるような状況にある我が国の支え手こそ団塊世代ジュニア世代であることが人口構造をみても明らかである(国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口 H24 推計).

2. 本研究の目的

本研究の目的は,今後増えるであろうと推測される団塊ジュニア世代の男性介護者に着目し,彼らの介護意識を明らかにすることで,サポート方法を考える基礎資料とするものである.

3. 方法

本研究では,機縁法により協力の得られた両親が健在で,親と別居している有職の36歳~45歳の既婚男性10名を対象とし半構造化面接を実施した(収集期間は2014年7月から11月).面接では対象者の基本属性(自身の年齢・親の年齢・家族構成など),詳細な就業状況,介護に対する知識の程度,介護経験の有無,親の介護について,親子関係についてに加え,配偶者や子との関係について自由な回答をもとめた.

面接内容は正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach ; M-GTA)による探索的な分析を行った. また,分析の際のテーマは「介護意識形成のプロセス」と設定し,分析焦点者は「団塊ジュニア世代男性」とした.

なお,本研究は,桜美林大学研究倫理委員会の承認を受けている(受付番号 ; 14018).

4. 結果

・生成されたカテゴリーと概念

データ分析の結果,24の概念,10のカテゴリー,2つのコアカテゴリーが生成され,次のようなストーリーラインが考えられた. カテゴリーと概念を提示する(以下,コアカテゴリーは《 》,カテゴリーは< >,概念は〔 〕で表す).

団塊ジュニア世代の男性は,親の年齢,病気,身体的な老化への気付きから,遠くない未来における<介護の予感>を感じ,それぞれの〔介護経験の有無〕や〔介護情報の有無〕から,介護経験や介護情報を持ってないものはやや漠然とした,それらを持っているものはより具体的に<介護のイメージ>をつくり,それぞれのイメージを基に介護を考え始める.

人は,様々な場所において様々な役割を持っているが,介護を考える上では,親や夫としての役割である〔親・夫としての役割〕,介護する親に対し自分が子である〔子としての役割〕の役割,潜在的に役割意識に影響を与えている〔潜在的な家意識〕が互いに影響を与えることにより生まれる,介護者としての<役割>を意識する.

介護意向の形成においては,《親へ想うこと》も大きな要因の一つである.介護を父親の介護と母親の介護とに分けて考えたときに,父親に対しては,家事スキルの不足を心配する〔不慣れな家事〕と,あまり家庭内でのアクティブではない姿からくる〔妻にまかせきり〕からなる<父親への想い>を抱き,母親に対しては,豊富な家事スキルを基にした〔頼れる家事技術〕,

家庭内でのアクティブである姿からくる〔家庭的な存在〕，母親は女性であり，〔守られるべき存在〕であるという3つの気持ちからなる〈母親への思い〉を抱く．

父親と母親に共通する感情としては，親への〔感謝の気持ち〕を基に〔親の望み〕を叶えたいという気持ちと，親の希望を押し量る〔自分であれば〕こうしてもらいたいという気持ちが生まれ，それらの〈親へ想うこと〉が介護意向に影響与える．

団塊ジュニア世代男性は，一方では，介護に使える〈マンパワー〉を〔自分が動く〕ものだけでなく，〔配偶者の協力〕，〔兄弟姉妹との分担〕，〔親が担う介護〕，〔専門職の手助け〕，〔施設の活用〕と家族の内外を超えて現実的に考えており，また，介護に必ずかかるコストである〈介護資源としての資金〉や〈介護に割ける時間〉も含め，〈リソース〉として非常に合理的に捉える一面も持っている．

そして，これら〈役割〉，〈親へ想うこと〉，〈リソース〉がそれぞれに影響を与え合い，その結果，〔はじまりは在宅〕から介護を始め，介護の負担が大きくなると〔施設に任せる〕という〈現時点での介護像〉を導き出す．

5. 考察

今回得られた知見として，緩やかな家意識の変遷があげられる．一昔前までは，長男が介護を担うという方法が一般的であったが，第一子であるか否かに関わらず兄弟姉妹で介護を分担する，協力しあうという体制が見られた．対象者は就業状況など介護で割かなくてはならない，自身のリソースに限界があることを認識しており，兄弟姉妹間，配偶者間，健在である親との役割分担が必要であると考えていた．彼らは，自身の生活や世帯を守りつつ，親の介護も両立しようとする姿も分析によって明らかとなった．これは，合理的な考え方であるが，介護を他者にも期待している側面があるとも考えられる．

これらのことより，旧来に比べ緩やかとなっている家意識は，高齢化による現役世代の負担増や職場における就業時間の長時間化などの厳しい社会環境の中で介護を行っていく合理的な方法として習得されつつあるものではないだろうか．

最後に，本研究の結果を基に，団塊ジュニア世代の介護に対する支援策を検討したその結果，介護選択の幅を広げ，在宅から施設という流れをスムーズに進める支援策として，介護の知識を含む介護情報へのアクセスルートの増加が考えられた．具体的には，アクセスルートの一つとして団塊ジュニア世代が使い慣れている SNS などのニューメディアを活用し，一方向的な情報提供だけでなく，相談形式のような双方向での情報提供も視野に入れることが望まれる．

引用文献 一覧

- 1) 厚生労働省：人口動態統計，2013.
- 2) 総務省統計局：人口推計，2013.
- 3) 東京新聞 Tokyo Web 「2025 年問題とは？ (No.483) 団塊の世代 75 歳 負担増が問題」 (2014 年 1 月アクセス)
- 4) 内閣府：少子化社会対策白書，第 1 章，2012.
- 5) 内閣府：少子化社会対策白書，第 1 章，2014.
- 6) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口，2012.
- 7) 厚生労働省：国民生活基礎調査，2001.
- 8) 厚生労働省：国民生活基礎調査，2013.
- 9) 斎藤真緒：男が介護するということ；家族・ケア・ジェンダーのインターフェイス，立命館産業社会論集，45 (1)，171-188，2009.
- 10) 彦聖美，鈴木祐恵，金川克子 他：高齢期の妻や親を介護する男性の介護状況に関する実態調査；石川県における介護支援専門員に対する質問紙調査，石川看護雑誌，10，37-46，2013.
- 11) 津止正敏：男性介護者のケア・コミュニティ構築と包括的家族介護者支援に関する実践的研究，ニッセイ財団平成 23 年度実践的研究助成対象研究，2011.
- 12) 中西泰子：若者の介護意識—親子関係とジェンダー不均衡—.100,勁草書房(2009).
- 13) 古谷野亘,岡村清子,安藤孝敏,長谷川万希子ほか:老親子関係に影響する子ども側の要因. 老年社会科学, 16(2):136-145(1995).